
『日韓併合一〇〇年のテロリスト』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『日韓併合一〇〇年のテロリスト』

【Nコード】

N2505N

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

大学中退、ニート歴二年の山田正義は、退屈な日常を送り、両親から働くように文句を言われながらも、自分ではどうすることもできないでいた。

時の世相はいえば、日韓併合百年を記念しての民主党代表・仙石首相の談話が発表されようとしていた。「土下座外交だ」と強硬に反対する右翼・保守勢力。そんな様子を見た山田の中で、次第に何かが変わり始める。

第一章 面白くないニート

ひとりの男が目を閉じて立っていた。男の脳裏には、膨大な動画が映し出されていた。男は人を探していた。人探しは男の上司からの命令であった。

「見つけたぞ。こいつが副王陛下が探し求めている男に違いない」

悪魔フラウロスは目を開けて呟いた。

面白くない。全然まったく面白くない。

とにかく私は毎日が退屈だった。退屈でしうがなかった。平凡な日々の繰り返し。それが年がら年中、毎日三百六十五日、毎時間、毎分毎秒、同じ。同じ同じ同じ同じ、とにかく同じことばかりだ。

私が誰かって？ 私は山田正義、いわゆるニートだ。二十二歳になる。私はとりたてて言うべき個性をもたない人間だ。ただ、やる気がない。というか出ない。勉強も部活も夢中になるほど打ち込めるものはなかったが、大学には行った。両親が大学を出なければとうるさいのでそれに従ったまでのことだ。

しかし、それも長くは続かなかった。大学二年生になって、突然、糸が切れたように、大学に行く気がなくなった。まあしかし、もともと入りたくて入ったとか、やりたい学問や好きな教授とかを私はもてなかったし、そもそも両親がうるさく言うという極めて消極的

な理由から進学した人間であるから、大学生活を続けられないのも、自然の流れなのかもしれない。

それからはニート生活である。ニート歴は二年になる。だが、今非常に危機的な状況に私は立たされている。

最初の一年はよかった。両親は私が大学を辞めると言いだしたとき、最初は強硬に反対したが、次第に理解を示すようになり、最後には賛成してくれた。そのときはものわかりのよい、いい両親だと私は思っていた。

しかし、ニート歴二年目に差ししかろうとした前後から、雲行きが怪しくなってきた。段々と、私に対する両親の言動が厳しくなってきたのである。嫌味や皮肉もよく言われるようになった。舌打ちされること、渋い顔をされることもしばしばである。

最近では、「就職しなさい」「バイトでもいいから働け」と言うてくるようになった。

だが、私はまるでやる気が出てこない。別に働きたくないというわけではない。その意欲が沸いて来ないのである。そんなわけだから、働けと言われてもどうしようもない。

ニート生活にも飽きてきた。テレビを見たり、ゲームをしたり、漫画を読んだり、小説を読んだり、本を読んだりして何とか今まで有り余る暇な時間を潰してきたが、それももうまういなくなってきた。

どんづまり状況である。私はどうしたらよいのだろうか。私は今、畳の上に寝転がり、天井を眺めながら、つらつらとそんなことを考

えている。しかし、状況を好転させてくれるようなアイデアは浮かんでこない。よく考えて見れば、すぐに良い考えが浮かぶような人間であれば、ニートなどにはならないのだろう。

私はどうすればいいのか。誰か教えて欲しい。しかし、私は相談するべき相手ももっていない。私には友人と呼べるような存在はない。私には何もないのだ。

何か、何かないものか。この絶望的状况を一気に打破できるようなチャンスは到来しないものなのか。

一発逆転の大チャンス。私はそれを待っている。いや、待っていた。待ち続けていた。しかし、そんなものはかつて一度とさえめぐって来たことはなかった。

突然、睡魔が襲ってきた。瞼が重くなる。私は眠気に自分を任せた。

「副王陛下、報告致します」

フラウロスは椅子に深く腰掛けた男に話しかけた。

「おお、フラウロス、帰ったか。で、なんか収穫はあったか？　めぼしいのはいたか？」

「この男など如何でしょうか？」

巨大スクリーンに山田の姿が映し出された。

「典型的ニートと呼ばれるタイプで、毎日退屈でしようがないと思っ
ています」

「ああ、山田正義か。そいつなら、俺、知ってるぜ」

「御存知だったのですか。それは失礼致しました」

「つうかさ、本当のこと言うと、最初からもうそいつを使うことに
決めてたんだよね」

副王ルシファーは意地の悪そうな笑みを浮かべて言った。

「それはどういう」

「いわば、探索はお前への罰ゲームだな。遊んでやったんだよ。感
謝しろ」

フラウロスは複雑な表情を露わにした。

「まあ、つまらんこと気にすんなよ。さて、俺はノートにこいつの
これからの行動予定を書き込んでいくから、お前はもう下がって
いぞ」

「はっ。失礼致します」

フラウロスは深々と一礼し、姿を消した。

「山田正義、お前はもうすぐ時代の申し子になるんだよ。へへへへ

第二章 退屈な、あまりに退屈な、ニートの日常

「ちょっと正義、あんたいつまで寝てるつもりなの！ いい加減、起きなさい！」

私は母の怒声で目を覚ました。まだ眠いの。眠くて仕方がない。眠気はまだ十二分にあるというのに、起きなければならない。そうしなければ、母の怒りがとても収まりそうにないからだ。

私は時計を眺めた。針は十一時十五分を指していた。

「もう十一時なのよ！ あんたはいつたい何時間寝れば気がすむの！」

母はそう言い残し、私の部屋から出て行った。

母がうるさいこともあり、とりあえず、私は二度寝は控えて、起きることにした。

まずタオルを確保し、まっすぐ洗面所へ向かう。洗顔・歯磨きをすませ、台所へ行き、朝食をとる。朝食と言っても、トーストを食べるだけだ。この頃はあまり食欲がない。何を食べても大して美味しくは感じない。私はどうかしてしまったんだろうか。

朝食も適当に済ませ、また歯磨き。そして新聞を読む。家がついているのは朝日新聞。新聞を読むといっても、見出しをチェックし、番組欄を読む程度である。

それから、居間に行ってテレビをつけた。十一時半前後になると、

テレビ局各局がニュースを流す。私は毎日欠かさずこの時間帯のニュースは見ることにしている。ニートであっても、やはり社会に関心を持たねばならないと考えているからだ。

しかし、そうは言っても、特に関心事は私には見当たらない。漫然とニュースを見ていると言って差し支えないだろう。

「仙石義人首相は、日韓併合一〇〇年に当たり、新たに首相談話を発表すると表明しましたが、野党からは批判が相次いでいます」

そういえば、今朝の朝刊にもそんな記事があったような気がする。テレビ画面に民自党の元首相安倍晋二が映った。

「これは由々しき事態です。こんなことをすれば、後世に大変な禍根を残すことになりますよ」

私はそういうもののなのかと思った。それだけだった。

私ははっきり言って、政治にあまり関心はないし、特に政治思想をもっているわけではない。何度か、政治番組？のようなものをテレビで見たが、やはり興味をそそられる政治課題は見つからなかった。

私はいわゆるノンポリなんだと思う。

さて、ニュースも見たし、食後の腹ごなしに、ランニングでも行ってくるか。その旨を母に伝えと、不機嫌顔で

「毎日お昼近くまで寝て、働きもせずランニングとは、いい趣味してるねえ」

」
露骨に嫌味を言われた。私は何も言い返せなかった。事実だからしょうがない。

私は家を出た。ランニングコースである遊歩道を目指し歩を進める。

遊歩道に着くと、そこに見知った人間を発見した。谷垣直人。民自党総裁・谷垣一禎の息子にして、過去に暴行事件を起こした経歴を持つ男。現在は無職で、暇を持て余しているのか、「廃人ニートは最下流小説を書けるか?」という何ともアレなタイトルのブログを運営しているという噂だった。

私は谷垣直人の顔を見知っていたが、向こうは私のことなど知りはない。私は谷垣を追い越し、走り続けた。

ノルマを達成した私は、家路についた。

帰宅するや、すぐさまシュワーを浴びた。

ここからが問題だ。特にすることがない。私は趣味人ではないのだ。趣味と言えるようなものは持っていない。しかし、現実問題として、膨大な時間が私の前に投げ出されているのである。これを私はどう処理すればよいのか。

「正義、あんた暇だったら、家の手伝いでもしなさい!」

また母の怒声が私の耳に入ってきた。仕方ない。どうせすること

などないのだから、炊事でも洗濯でも何でもやってやろうと思った。

私はまず台所へと歩き出した。

「副王陛下」

フラウロスが巨大スクリーンに映った山田正義を前にして、ルシファーに話しかけた。

「なんだよ」

「本当にこの男で間違いないのでしょうか？ 人選ミスということはないのでしょうか？」

「俺がミスる？ ありえねえなあ、おい。お前マジで言ってるわけ？ ぶっとばすよ？」

「い、いえ。この男が大それたことをしそうに見えなかったものですから」

「こういうだらしない奴こそ、追い詰められたとき、やけになって馬鹿を起こすんだよ。そういうもんだ。俺は人類誕生当初からの人間観察で、それを嫌というほどに学んだんだ。俺の目に狂いはない」

ルシファーは確信をもって断言した。

第三章 終わりある挨拶

ドアが開く音がし、足音が耳に届く。父が帰ってきたようだ。

「正義！ 正義はどこだ！ お父さんが仕事から帰ってきたんだぞ！ 出迎えるのが常識だろうが！ この馬鹿息子！」

普段は温厚で大人しい父も、ときたま性格が豹変することがあった。どうやら今日は悪いことに、その日らしい。じっとしていられないので、しぶしぶ、玄関に行く。

赤ら顔の父がそこにはいた。

「おお！ 馬鹿息子！ 俺に挨拶しろ！」

「御帰りなさい」

私は半ば機械的に「挨拶」してやった。

「なんだその言い方は！ 全然気持ちがこもっとらんな！ もう一回だ！ 俺が満足するまで、何度でも言ってもらうぞ！ さあ、言え！」

私はその日、父が納得するまで延々と「御帰りなさい」を繰り返した。

その何度目かが終わったとき、

「もういい。部屋へ戻れ。俺は寝る」

父は自室へと向かっていった。やっと父から解放された私も自分の部屋へと戻り、寢床についた。

家事手伝いと「御帰りなさい」に費やされた一日であった。正直なところ、少し心身ともに疲労した感じがする。まあ、寝ればそれも取り除かれるだろう。

その夜、私は途中で目が覚めた。時計を見ると、午前三時だった。どうして起きたのだろう。暑さの所為か。いや、それは違う。ちゃんとクーラーはつけている。最近猛暑続きなので、ほぼ毎日クーラーをつけていた。こんなことは初めてだった。私は二度寝しようと試みた。

結論から言おう。二度寝は失敗に終わった。なぜか目が覚めてしまい、眠気がやってこなかったのだ。

しかし、私はどうせいつかは眠れると思い、ペットに寝続けた。だが、駄目だった。とうとう夜が明け、鳥の囀りや新聞配達員が乗ったバイクの音、仕事に行く父の動作の音などが耳をとらえて離さない。

私は二度寝を諦め、ネットをやることにした。しかし、私にはネットでもすることもあまりない。特にお気に入りサイトもなければ、調べたい事柄もない。私は知的好奇心というものに、恵まれなかった人間なのだ。

だが、ネットでもしななければ、やってられなかった。他にすることも無いのだ。

仕方なしに、巨大掲示板「2ちゃんねる」にアクセスする。しかし、アクセスしたはいいものの、先ほども言った通り、特に興味を持った対象があるわけではない。

そのとき、ふと私の脳裏に昨日の午後のニュースで見た仙石首相の談話が浮かび上がってきた。もうこれを検索してやろうと思い、「仙石 談話」「日韓併合 談話」などでスレッドを検索してみた。すると出るわ出るわ、複数のスレッドが掲示板を横断して乱立していた。そのひとつに私はアクセスしてみた。

——さすがは全共闘の革命闘士だな W 予想外の動きではない。

——センゴクは筋金入りの真正反日極左。誰か心あるものがこいつを何とかしてくれないものか。

——センゴク、死ねばいいのに W

——姦酷の手先、死ね！

——おいおい、右翼諸氏はいったい何やってんだよ。こういうときのための酷使様だろw

——そうそう、本物の右翼なら、こんな奴（ry

——今こそ第二の岩崎文太の登場が求められているというのに、この頃のウヨはだらしがねえなあ。泣けてくるよ。

——はげどう。最近の右翼は駄目になった。岩崎は例外で、特別変異型右翼と言える。

——どこまで土下座外交続けるつもりだ、大概にしろよ、センゴク！ しかもこいつ、日韓基本条約で放棄した賠償までやるつもりでいやがる！ こんな奴が首相とは、いよいよ日本も末期だな。早いとこ民自に政権に戻してもらわないと、このままだとどんどん日本は特アの餌食になってくよ。

——参院選で民自に負けたんだから、退陣するべきだったんだよ、

センゴクは。れがのうのうと居座っていやがる。腹立つねえ。

どのスレッドでも概ねこんなレスが目立った。

七月十一日に参院選があり、与党主民党は大敗を喫し、野党民自党が勝利した。しかし、第三極を掲げた「みなさんの党」も議席を伸ばしていた。仙石首相は選挙で大敗したにもかかわらず、早々と続投を宣言し、今日に至っていた。

今はもう八月だ。私は選挙に行ったことがない。政治には関心がないし、というか、関心が持てない。だから、今騒がれている仙石談話にしたところで、どうだっていい出来事ではあったが、2ちゃんねるで調べてひとつわかったことがある。それは、少なくとも2ちゃんねるにおいては、仙石談話は否定的評価しか与えられていないということだ。

それを収獲にして、私はパソコンをシャットダウンさせ、台所へ向かった。午後十一時辺りまで寝ていた私にとっては、久々の早めの朝食である。

第四章 観察者への願望

台所に行くと、母が居た。母は私の顔を見るなり、

「ニートなんかやってても、ちゃつんとご飯は三食食べるんだねえ。働かざる者なんとやらはどこにいったんだろうねえ。あんた顔見る度に、そう思うよ」

そう言い残して、消えた。最近、両親の嫌味や皮肉がその内容が質量ともにパワーアップしているような気がしてならない。しかし、私に非があるの、から、しょうがない。ただ我慢し、聞き流すしかなかった。というか、それしか私は対処の仕方を知らなかった。

トーストを食べ終え、歯を磨く。これまで数え切れないほどやってきた作業を、今日も欠かさずにやっている。確かに歯の健康のために歯磨きは必要だ。朝食も食べねばならない。しかし、それをして何だというのだろう。

私には、人生を生きる意味がわからない。人はなぜ生きるのか。なぜ働くのか。自分のため？ 家族のため？ 会社のため？ はたまた、国家や社会のためなのか？

私は何かを行うとき、常にその意味を考える。しかし、答えが出ることは稀である。むしろ、答えの出ないことの方が圧倒的に多い。

毎日毎日、同じことの繰り返しで何が楽しいのだろうか。顔を洗い、歯を磨き、朝食をとり、また歯を磨き、会社や学校へ行く、仕事や授業を受け、そして昼食を食べ、また仕事や授業を受け、そして帰路につく。あるいは、どこかに寄り道したりする。帰宅後は手

洗いうがいをし、各々好きなことに時間を費やす。それは趣味だろう。テレビを見たり、本を読んだり、ネットをやったり、ゲームをやったり、あるいは家族と話をし、夕食を食べ、また好きなことをやり、しまいには眠るために床に就く。

その繰り返しじゃないか。どこが楽しいんだ？ 私にはわからなかった。

さて、朝食は食べた。午後のニュースにはまだ随分時間がある。

また仙石談話のスレでも見るかと、私はパソコンの前に座った。

スレを見て、私は仙石談話断固反対国民総決起集会なるものが開催されることを知った。今度の日曜日にやるらしい。出席者の中には、有名政治家や保守的な学者・知識人・活動家が含まれていた。主な者をあげると、安倍元首相、麻生太郎元首相、沼平赳夫元経産大臣、原石慎太郎東京都知事、部渡昇一、崎岡久彦、井桜誠、戸瀬弘幸、村西修平等である。私は安倍や麻生や原石はさすがに知っていたが、他の出席者は記憶になかった。まあ、政治に関心がないから、仕方ない。

ふいに私はこの集会に行ってみようかなどという考えが浮かんできた。私はこの手の集会やデモに参加したことなど、ただの一度とてない。それなのに、なぜかこの集会には行ってみたくなかった。日韓併合も仙石談話も私にとってはどうでもいい事柄に過ぎなかったが、一般参加者にどんな感じの人間が来るのかが、無性に知りたくなったのだ。見て見たかった。やはり、一時期ネットに出回った「ネトウヨの実態」というイラストのような、キモオタ系の人ばかりが参加しているのだろうかという考えが私の頭をよぎった。

そう。そうなのだ。私は観察者になりたいと思ったのだ。保守派・右派人間の観察者に。これはネットではヲチと呼ばれる事態だ。私はウォッチャーになろうとしているらしかった。

なってやろうじゃないか。よし。私はまだ見ぬ参加者たちの風貌やオーラに心躍らせ、柄にもなくうきうきしてしまっていた。ここには私が知らなかった私が存在した。私には観察者の属性があったのだ。驚きとともに、ああ、やはり、という思いもあった。

「正義、遊んでばかりしないで、家事を手伝いなさい！ 何度行ったらわかるの！ 人から言われる前に自分から動きなさい！」

ドア越しに母の怒声が聞こえてきた。私は仕方なく、席を立った。

「山田正義は席を立ち、まず台所へ行き、皿洗いを始めた……」

ルシファーはせっせと自らのノート、ルシファー・ノートに山田がこれからとる行動を書き込んでいく。ルシファー・ノートは書き込まれた出来事が現実化されるという恐るべき代物であった。

「次に正義は風呂場へ行き、風呂掃除をする。次はトイレ掃除。その次は洗濯機で洗濯。その次は洗濯ものを干す。その次はご飯をた……」

ルシファーの腕の動きは止まらない。

「人とおり家事を終えると、今度は母親に頼まれ、おつかいに行く。そして帰宅後、2ちゃんねるの仙石談話スレをまた覗く、と。こんなもんか」

ルシファーはふうと一息ついた。

「お疲れの御様子ですね」

フラウロスが横に立っていた。

「お前、居たのかよ」

「先程から副王陛下のお仕事を拝見させて頂きました」

「お仕事ぶり？ そんな大したもんじゃねえよ。こんなもん、俺の趣味・遊びだよ」

「そうですか」

「フラウロス、よく見とけ。この男の変貌ぶりをな。こういう奴は、免疫がついてねえから、下らん政治思想やイデオロギーとやらに毒されやすいんだよ。今にこいつはがちがちごりの保守派・右派になるぜ。きつとな」

ルシファーはそう予言して見せたが、フラウロスは半信半疑だった。到底山田正義がそんな人間に変貌するなど、思えなかったからである。

第五章 2ちゃんねるを巡っての母親との対決

私は手伝えるだけの家事をすませると、パソコンに手を触れた。もちろん、仙石談話に関する2ちゃんねるのスレを見るためである。

スレを読んでいると、突然、何の前触れもなく、母が部屋に入ってきた。

「あんたいつも、部屋にいたときに何してるの？ あ、パソコンしてたの。何見てるの、あたしにも見せて！」

母はパソコン画面を覗き込んだ。そして、瞬時に不快な表情を浮かべ、半ばヒステリックに言い放った。

「あんた！ これ2ちゃんねるじゃない！ こんならくでもないもの見て、何してるのよ！ 紫筑哲也さんが言ってたでしょうこんなの、便所の落書きだって！ 2ちゃんねるなんてのはねえ、社会の落ちこぼれどもが不平不満を恥も外聞もなく、プライドも捨てて、本能のままに感情を吐き出す場所なのよ！ そんなこともわからないの、あんたは！ それに何よこれ！ チョンだの！ チョン公だの！ チョウセンヒトもどきだの！ キムチ人だの、下らないことばかり！ 差別語ばかりじゃない！ あんたは朝鮮の人を差別する人間になっちゃったわけ！？ どうなの、正義！ 正義って名前が泣いてるよ、まったく。ちゃっちゃと答えなさいよ、正義！」

私は母のあまりの剣幕に、すっかり恐れおののいてしまった。しどろもどろになりながら、何とか弁明した。

「そ、そんなわけないだろう、母さん、僕は朝鮮の人を差別したり

はしないよ」

「じゃあ、何でこんなの見てるのよ！」

「いや、ちょっとね、暇だったもんだから」

「暇なら便所の落書き見に行くわけ、あんたは！ 情けないよ、あたしは！」

「は、ははははははは」

私はこの手の状況に不慣れな人間である。笑ってごまかすくらいしか、方法を知らなかった。しかし、私のごまかし笑いほさらに母を刺激してしまったらしい。焼け石に似水、火に油を注ぐを、まさか自分がベタにやってしまうことになるとは、二十二年間生きてきて、初めての体験であった。

「何笑ってんのあんたは！ あたしが何かおかしいこと言った！？ ええ！」

「い、言っていないよ」

「じゃあ何で笑ってんのあんたは！ 人が本気で怒ってるのが、そんなにおかしいわけ！ あんたってのは、つくづく不真面目・不誠実な男だねえ！ あたしは、あんたをそんない加減な人間に育てた覚えはないよ！ ……はあ。どうしてこうなったんだろうねえ。あんたが大学を中退するまでは、お母さん、あんたに裏切られたことはなかったんだけどね。……はあ」

ため息をつきたいのはこちらとて同じである。しかし、この状況

下でそれを行おうものなら、さらに情勢が悪化するのは火を見るより明らか、ここは我慢を飲んで自重するしかないだろう。いや、ここはもっと積極的に打って出るべきだろう。ここは下手に出て、相手に迎合して、媚び諂うべき場面なのではなからうか。そんな考えが私の頭をよぎった。

「本当、申し訳ないです、母さん。勝手に大学やめたりして、本当ごめんなさい。謝ります。すいませんでした」

私は深く頭を下げた。平身低頭である。

「正義、わかってくれるの？」

母の顔がぱあっと明るくなった。

「うん、僕はわかってるよ。わかるよ、母さんの気持ち」

「そう。わかってくれるのね。母さん、うれしいわ。じゃあ」

「うん？ 何だい？」

「もう2ちゃんねるは二度と見ないって約束して頂戴」

何を言い出すんだ、この中年女は。そんなこと約束できるじゃないではないか。そりゃあ、私はことさら2ちゃんねるに愛着があるわけでもないし、ねらーを自称するほどの利用者でもない。書き込んだことなんて、数えるほどである。しかし。しかしである。だからといって、するなと言われてはいそうですかと言うほど私はものわかりよく出来てはいない。だが、それを今ここで母に暴露するわけにはいかない。せつかく良い状況になってきたのだから、それを自

「ええ、確かに。徐々にはですが、悪人化していますね。しかし、まだこれだけでは」

「ああ、これでは、まだまだだ。俺が望む人物像からは程遠い。もう少しの俺の『教育』が必要だな」

ルシファーは忙しそうにペンを動かし、またルシファー・ノート
を文字で埋めていった。

第六章 お詫び地獄

玄関のドアが開く音がする。父の御帰りだ。

「あなた、お帰りなさい」

母が出迎える。

「ただいま」

今日は酔ってはいないようだ。ほっと一安心する私が居た。しかし、次の母の一言によって私は一気に窮地に立たされることとなる。

「聞いてよ、あなた、正義が2ちゃんねるなんか見てたのよお」

「何、2ちゃんねるだと？ あんなろくでもないものを見ていたのか。まったく、正義め。下らんものを見おっからに」

「あたしも厳しく言ってやったんだけど、あなたからもなんか言ってやってよ。あんなもの見てたら、きつと頭がおかしくなるわよ」

「その通りだ。私からも言って聞かせよう」

父の足音が私の部屋に近付いてくる。ドアがノックされた。

「正義、起きてるか。入るぞ」

父は部屋に入ってくるなり、きつと私を睨めつけた。

「母さんから聞いたぞ。お前、2ちゃんねるなんか見てるらしいな。あんなものはな、人間の屑が見るものなんだ。社会の落伍者の巣窟なんだよ、あこは。それをわかっていて見ているのか。どうなんだ、正義、答えなさい」

何を言うのだ、この酔っ払いオサーン「お帰りなさい」キチガイは。あのときは私は寛容にも我慢に我慢を重ねて、何も文句は言わなかったというのに、この男ときたら、平然と私に不満をぶつけてくる。

しかし、面倒臭いことになったなあ。とりあえず、適当に返事で出してやるか。

「わかってるよ、父さん。僕が馬鹿だったんだよ。もう二度とアクセスしないから、安心してよ」

私は快心の営業スマイルを父に送ってやった。しかし、父はそれに呼応して笑ってはくれなかった。この堅物め。

「わかってるのなら、どうしてアクセスしたりするんだ。やっぱりお前は馬鹿だったんだな。父さんは悲しいよ。こんな馬鹿息子にするために、お前を育ててきたわけじゃないんだぞ」

「すまないと思ってるよ、父さん」

「心にもないことを言うな。少しでも申し訳ないと思うのなら、どうして働かないんだ？ 答えてみなさい、正義」

「働くよ、働くって。今日もいいバイトがないか、検索したよ」

「バイト？ 父さんはお前に定職に就いて欲しいんだよ。バイトなんいいから、ハローワークに行きなさい、わかったな？」

「はい、わかりました、わかりましたとも」

つい、父への反発がちらりと言葉に出てしまった。

「なんだその言い草は！ わかったのなら、一回だけ言いなさい！」

「すみません」

父の顔がいつものまにか、憤怒の形相に変わっていた。

「お前は私をなめているんだろ！ 私にはわかってるんだぞ！」

「な、なめてなんかいないよ。どうしたの、父さん？」

本当にどうしたんだ、このオッサンは。何をいきなりキレ出すことがある？ 何か不味いこと言ったか、私は。言っていないだろうが。わかったをたった二度言っただけで、このありさまだ。どうなったんだ、このオッサンの頭は、脳は。

「どうもこうもない！ お前の発言が父さんを怒らせたんだろうが！ 親の脛かじってばかりの馬鹿息子の分際で、親に反抗的な態度をとるなんて、生意気だ！ ちゃんと父さんに謝りなさい！」

完全に頭に血がのぼってしまったな、このオッサン。もうこうなると、手がつけられない。

「すみませんでした」

私は椅子から立ち上がり、父に頭を下げた。しかし、父はまだ不満だったようだ。

「それだけか？」

「はい？」

私はわけがわからない。今謝罪したではないか。

「もっとちゃんと謝れ！ 両手両足を床について、謝るんだ！ すいませんじゃなく、申し訳ございませんでしたとな！」

私は父のいいなりになった。

「申し訳、ございませんでした」

「なんか酷く感情がこもってないような気がするなあ、父さんは。もう一遍言いなさい！」

「申し訳ございませんでした」

もうどうとでもなれと私は思った。

「もう一遍だ！」

私のお詫び地獄はそれから約三十分は続いた。

第七章　なにゆえに

私は父へのお詫び地獄を何とかやり過ごし、その日はさすがに2ちゃんねるにアクセスするのはまずいと考え、夕食を取り、早めに就寝した。

私は来るべき日曜の仙石談話断固反対国民総決起集会まで、待たねばならなかった。考えてみると、今日はまだ金曜日だった。はあ。大した日数ではないが、気が遠くなりそうだった。

しかし、床に就いたものの、その日もなかなか寝付けなかった。集会に参加したいという思いが、私を興奮状態に置き、眠らせてくれないのか。そんな下らぬことを考えながら、私は何度も寝返りを打ったり、何度か起き上がって、部屋の中をぐるぐるして、再びベツトに入りこむということを繰り返した。

玄関のドアが閉じる音で、私は目覚めた。午前七時。

いつの間にか私は眠ってしまったようだ。私は幾たびかの起床を体験したわけだが、今日はどうも気分が悪い。体がだるい。なんというか、疲労感が伴った目覚めであった。

今日は土曜日だ。いよいよ明日は待ちに待った集会当日だ。そうだが、今日のうちに集会現場を下見に行くというのはどうだろうか。我ながら、名案だと自分でも思った。

そう考えると、いてもたってもいられなかった。私はさっさと洗顔、歯磨き、朝食、歯磨きをすませると、部屋着を脱いで、外出の準備にとりかかった。

パソコンを起動させ、集会現場の最寄り駅へのルートを確認する。

よし、準備万端整った。出発だ。念のため、東京二十三区の地図をリュックサックに入れ、玄関へと向かった。

私が玄関に行くと、母が飛び出してきた。

「あんた、どこ行くの？」

正直、面倒臭かった。

「散歩だよ、散歩」

私は短くそう告げると、ドアを開け、外へ出た。

「あー、つまんねえなあ。早く正義に事件起こさせてえよ。あー、つまんねえつまんねえ」

ルシファーは大きく背伸びをした。

「それでしたら、そのようにノートに書かれてはどうですか？」

フラウロスが進言した。

「お前さあ、それもつまんないぜ。つまらん考えだと思わんか？」

「どうしてでしょう？」

フラウロスは腑に落ちないと言った顔つきである。

「一から十まで俺たちが決めちゃったら、つまんねえだろうって言うてんだよ」

「わかりません、私にはルシファー様の御考えが。創造主足る我々がなぜ人間の全行動を決めてはいけないのでしょうか？」

今度はルシファーが不思議そうな顔をしている。

「わからんとはな。そんなんだから、お前は駄目駄目なんだよ」

ルシファーはフラウロスに改まったように向き合い、言った。

「いいか？ よく聞けよ。確かに俺たちは創造主だ。しかし、だからといって、何もかも決めてしまったら、何と言うか、アレだよアレ、最初から最後までわかってしまっているわけだから、面白くねえ。この意味、わかるか？」

「ええ、まあ」

「偶然性というものを残しておきたいんだよ、少なくとも俺は」

「そういうことでしたか」

「が、しかしだ、それも俺はつまらん。どうして創造主の一員たるこの俺が人間の行動を待たなきゃならないんだ？」

「ですから、それでしたら、ノートに」

第八章 満たされる観察願望

そして集会当日の日曜午前十一時五十分、私は集会場所に居た。十分前の時点で、既にけっこうな人数が集まっていた。千人以上はいるのではないだろうか。

私は待ち時間も無駄にしたくなかった。私はなぜここにいるのか。なぜ来たのか。なぜ日韓併合一〇〇年仙石談話はおろか、政治にすらあまり関心のない私が、だ。

もちめん、ヲチするためである。誰を？ 登壇者、参加者をだ。そのためのみ、私はここにいる。

さあ、観察劇の始まりだ。主役はむろんこの私、観察対象たちは脇役に過ぎない。

出てこい、脇役ども。私がとくと観察してやろうじゃないか。

私は辺りを注意深く見渡した。

ふん、つまらん。どいつもこいつも至ってどこにでもいるような、何の変哲もない、普通の平凡な凡人ばかりではないか。

もっとこう、ないのか。いないのか。

そう、あれだ。イラスト「ネットウヨの実態」で描かれたような、キモオタ系ウヨはいないものなのか。

私は懸命に探した。探しまくった。しかし、徒労に終わった。

いないのだ。そんな人間は、いないのだ。

がっかりだ。本当に落胆した。下見までして、ここに来た意味は何だったのか。

気にしてもしようがない。こうなったら、気を取り直して、登壇者たちを観察してやろうじゃないか。そうだ、そうしよう。

集会が始まった。司会者がだらだらとこの集会の趣旨を述べた後、ようやく登壇者たちの挨拶が始まった。

最初に立ったのは安倍元首相だった。

「皆さん、私の話を聞いて下さい。今回、仙石首相が出そうとしている談話、巷では仙石談話と呼ばれているものですが、これははっきりいってもう、出す必要のないものです。韓国に植民地支配に対するお詫びを表明する内容のものです。韓国に植民地支配にばすむのでしょうか。そして、それは果たしてお詫びするだけですか。それと次第によっては、日韓基本条約で放棄したはずの賠償まで、話が蒸し返され、皆さん国民の血税を韓国に差し出すと言う結果になってしまいます。そういう意味で、この仙石談話は、将来に大変な禍根を残す、有害無益なものなのです。だいたい、政府が特定の歴史的評価を示すこと自体が、そもそもおかしいことなのです。そんなこと、するべきじゃない、歴史家に任せるべきです」

次に、麻生元首相が挨拶した。

「我々の偉大な先達たちはね、韓国を近代化したんですよ。ハンダ
ルを普及させただって、日本人がやったことなんです。今日の韓国
があるのは、日本の統治のおかげとっていい。むしろ感謝されこ
そすれ、詫びることなんて、まったく、ありやあしません。仙石さ
ん、あれは反日極左活動家ですから、歴史的事実をねじまげようと
するんです。彼らはとかく日本を悪く言わなきゃ気が済まんですよ
よ」

沼平元大臣が登壇する。

「今こそ立ちあがるんだ、日本よ、日本民族よ。こんな国辱的な談
話、断じて許してはなりません。我々『立ちあがるんだ日本』は、
微力ながら、日本のため、老骨に鞭うって、粉骨碎身、尽力するつ
もりであります。断固として、阻止する決意です」

原石慎太郎都知事の番になった。

「仙石さん、あの人は、ネットでは在日朝鮮人だ、帰化人だという
噂でもちきりなんですな。まあ、あくまで噂なんでしょうが、そう
いう噂が立つ人物だということは、知っておいた方がいいですよ、
皆さん。在日や帰化人でなくたって、あの人の中身が日本人じゃな
く、思考が反日韓国人に似てる、というか、そのものなのは、厳然
たる事実ですからな」

次に英語学者・部渡昇一が登壇。

「麻生さんの仰る通りなんです、本当は我々の偉大な先人たち、御
先祖様は、韓国にいいことをしてやったんです。それなのに、彼ら
はまるで日本にお礼を言わない。それは、彼らが異常にプライドが

高い民族なのです。彼らは、自国が日本の保護国になったことに對して、非常に自尊心を傷つけられたのです。それゆえの反日教育なのです。しかし、だからといって、何も彼らに与してやる必要はありません。先祖を不当に貶めることはない。間違っているのは、韓国なんですからね」

元外交官・崎岡久彦の出番が回ってきた。

「真の保守とは何か。それは、今ここに集まった皆さん自身です。そもそも、歴史認識問題を外交問題にすること自体、おかしいことです。そういうことは、本来あってはならないことなのです。それを、中韓と仙石首相は理解していない」

井桜誠なる人物の番になった。かなりの肥満体で、眼鏡もかけている。これだ。これなのだ、私が待ち望んでいた人物は。オタクっぽいデブ男。典型的キモオタと言える。

「大韓民国って言うでしょ？ あの意味わかります？ 大いなる強姦の民の国、レイプ大国という意味なんですよ。・・・・・・犯罪韓国人を、東京湾に叩きこめ！ あいつらはゴキブリです。日本にたかる寄生虫です。あんな連中の言うことなんか、一切聞くことない！」

井桜の発言は他のどの登壇者よりも過激で、目立つものだった。後にも挨拶した者がいたが、彼の所為で印象に残らなかった。それほど私には強力な演説であった。私はしばし呆然としていた。

第九章 キモオタデブ系は如何にキャラが濃いか

司会者が集会の終わりを告げた。今からデモ行進へと移行するといふ。そのデモには、かのキモオタデブ系・井桜誠も参加するらしい。しかも、先頭きって行進するといふのだ。これは逃さない手はない。この機を逸して、何のウォッチャー・観察者か！

集会スタッフの指示に従い、私は整列した。

デモ、それは私にとって初めての体験であった。初体験。性的な意味にとると、すけべに聞こえる言葉ではある。

行進が開始された。さあ、井桜よ！ 私をまだ見ぬ未開の地へ連れて行ってくれ！

私は興奮していた。興奮しきっていた。この、しばらく忘れてしまっていた感覚が、井桜の独特のアジによって、再び私に帰ってきたのである。

私はその意味で、井桜に感謝しなければならなかった。

井桜の声が飛ぶ。

「仙石談話、断固はんたーい！」

彼の声に呼応して、シュプレヒコールが上がる。千数百人が同時に拳を振り上げ、同じ文句を唱えるのだ。私はえもいわれぬ恍惚の内にいた。

「仙石義人は、在日だあ！」

初めはとまどっていた私だったが、私も大声を張り上げることができた。

「仙石は帰化人だあ！」

「仙石は特アの手先だあ！」

「仙石談話、許すまじ！」

「仙石は朝鮮半島に帰れー！」

「反日極左自虐史観の申し子・仙石を、朝鮮半島へ強制送還しろお！」

「仙石は真正売国奴・真正国賊・真正非国民だあ！」

「断固として、この愛する日本を、韓国人から、守りぬくぞお！」

「野河談話・山村談話を破棄しろお！」

「これ以上土下座外交を続けさせるなあ！」

「次の衆院選で、絶対仙石を落選させるぞお！」

肥満体は吼えた。吼えに吼えた。こんなに吼えまくる肥満体は見ることがない。このデブ、只者ではないと私は確信した。

このデブはよく汗をかいだ。猛暑続きで、今日も猛暑なのだから

無理もないが、それにしても、このデブはよく汗を流していた。デブと猛暑日は相性が悪い。それなのに、このデブはよく頑張っていると思つた。やはりこのデブからは他のそれとは異なったものを私は感じ取つた。

デモ行進は首相官邸前まで行って終了した。

肥満体がマイクで話す。滝のように流れる汗をふきながら。

「皆さん、これで仙石もさぞかし震えあがつたことでしょう。仙石談話に反対する勢力が、こんなにも膨らんでいることを知つたわけですから。仙石内閣打倒へ向けて、今後も頑張つて参りましょう。皆さん、暑い中、お疲れさまでした！」

デブが深く頭を下げている。

デモは終わった。終わってしまった。楽しかったデモ。しかし、思い返してみると、井桜誠の強烈なキャラクターしか思いだせることはなかった。それほどまでにこのデブは圧倒的な存在感を醸し出していた。

どうしたら、あんなデブになれるのだろう。いや、別に肥満体になりたいわけではない。どうしたら、ああいう独特なオーラが出せるようになれるのか。

どうすれば、ああいうふうにキャラクターが濃厚になれるのか。

私はそれが知りたかつた。

本人はまだ目の前にいた。参加者となにやら談笑している。

本人に直接聞くべきだろうか。「どうしたらあなたみたく、キャラが濃くなれますか?」、あるいは、「どうしたら存在感出せますか」、あるいはまた、「どうしたら自分のオーラが持てますか、出せますか」。

聞くか。聞いてみるか。

いや、駄目だ。私はコミュニケーション力が至って弱いのだ。弱いどころではない。そんなもの、私にはないのだ。どこをどう探したって、出てこないのだ。

私はとぼとぼと家路へと歩き出した。

……結局、この集会、このデモで学んだことと言えば、井桜誠がキャラが立っている人間であると言うことを、知ったことだけだった。

無駄足ではなかったか。

そうだ。無駄だったんだ。私はどうせ、あんな濃いキャラにはなれっこない。

私は骨折り損のくたびれ儲けをやったというわけだ。

何だったんだろうと心底思う。

もう考えるのはやめよう。虚しくなるだけだ。

私は思考を停止したまま、両足を忙しく動かした。

第十章 両親による猛攻

私は自宅に帰ってきた。まるで魂が抜けた抜け殻の如くなって。

玄関で靴を脱いでいると、母が私を認めるなり、何やらがみがみと言いだめた。

「あんた、こんな何時間も、どこ行ってたの！」

正直、相手にするのも面倒だった。

「どこでもいいだろ？ どこ行こうが僕の勝手じゃないか」

ぶつきらばうにそう告げ、自室へ向かおうとする。私の右肩を母が掴んだ。

「質問に答えなさい、正義！」

母は私が真面目に答えるまで解放してくれないらしい。それなら、仕方がない。

「集会だよ、集会」

「しゅ、集会！？ あんた、散歩行ってたんじゃなかったの！？」

母が驚きのあまり、口を大きくあんぐりと開けている。なんというまぬけ面だ。私は思わず笑ってしまった。

「何笑ってんのあんた！」

母が鋭い目つきで私を睨めつけた。

「ご、ごめんなさい」

ここは怒らせてはいけないと思い、素直に謝った。

「何の集会に行ってたのよ？」

「仙石談話断固反対総決起集会」

私は無造作に機械的に教えてやった。このお婆さん、本当、面倒臭い。かなわないな、真面目に。

「何よそれ？ 何なの？」

母は理解できないようだ。

「仙石談話、知らないの？」

「名前だけは聞いたことある……。あんだ！ それ右翼の集会じゃないの！」

母の顔がみるみる険しくなった。

「まあ、右翼というか、保守的というか、タカ派的な人の集まりではあるだろうね」

私は至極適当に相槌を打つ。

「まあって何よ！ まあって！ 右翼の集会に行くなんて、あんだ

何考えてるの！ 頭でもおかしくなったの！ あんな奴ら、チンピラゴロツキじゃない！ あいつらはね、暴力団とも深いつながりがあるのよ！ それわかってて行ってるの！ どうなの、正義！」

「ああ、そういえばそんな話も聞いたことあるね」

「あるねじゃないでしょう！ 本当に何を考えてるのあんたは！ 馬鹿じゃないの！ もういい年なんだから、それしきのことわからなくてどうするの！ あんた、将来右翼やヤクザになろうかと思つて、そのコネつくりのために参加したんじゃないでしょうね！ どうなの！」

「ま、まさか、そんなわけないだろ。母さんの勘繰り過ぎだよ。は、はははははは」

また出てしまった。都合が悪くなると、なぜか笑ってしまう癖が。私の悪癖であると思う。

「はははじゃないでしょ、正義！ 人が真面目に怒ってるのに、何なのその態度は！ あんたの頭はどうなってるの！ あんた、本当に完全に馬鹿になっちゃったんじゃないの！ ……もういや！ このことはお父さんにも伝えておきますからね」

「伝えたきゃ伝えりゃいいじゃない」

私は話を切り上げにかかった。母の手を払いのけ、その場を離れる。

「何その言い草は！」

母の発言に返答せず、私は自室へこもった。ベッドに倒れかかる。

もう何もしたくなかった。とにかく心身ともに疲労が激しかった。どうしてこんなにも疲れるのだろうか。ただ歩いて、拳を振りあげ、多少大声を出したただけなのに。

ドアをノックする音がする。

「ちょっと正義！ 起きてるんでしょ！ お父さんが電話で今話したいって。すぐ出てきなさい！ わかったわね！」

母がドアから遠ざかっていく。

どうすべきか。これは出るしかなさそうだな。

私は電話口に立った。

「正義か。お前、右翼の集会に行ったんだってな。母さんから聞いたよ。情けない。お父さん、本当に情けないよ。まさか自分の息子が右翼になるなんてな。……。泣きい気分だよ、お父さんは。お前はそんなに親を泣かせたいのか。何度親を泣かせれば気がすむんだ、正義！ お父さんに謝りなさい！」

「すいませんでした」

「……。もう二度と右翼の集会なんて行くんじゃないぞ？ わかったか？」

「わかりました」

父は何も言わず電話を切った。

「この親不孝の馬鹿どら息子！」

母が物凄い恐ろしい形相で罵ってきた。恐ろしすぎた。私はいたたまれず、急ぎ足で自室へ逃げかえった。

第十一章 お前は右翼だ！

私はその日、昼間はごろごろして過ごした。何もする気が起きない。この無気力はどこからやってきたのだろう。やはり、井桜誠の強烈にして濃厚なキャラクター性と、それに比較した自分の没個性性に原因があるのではないかと私は考えた。

私ははっきりいってキャラクターが薄い人間だ。存在感というものが無い。そう、私はあの集會会場で参加者の中に、何の変哲もない普通人・凡人たちを多く見出したが、かくいう私も彼らとまったく同類であったのだ。

今になってそのことに気がついた。そしてその思いは私を苛んだ。

私も井桜のような人間になりたいと心の底から願った。平凡なままの人間なんて、嫌だ。

私が真剣に思い悩んでいると、ドアをノックする者があった。もちろん母である。

「あんた、ご飯は食べてきたの？ 何も食べずに出かけたみたいだったけど」

そういえば、私は昼食を食べ忘れていた。

「食べてない」

「食べてないの？ 何やってんのあんたは。食べるもの食べないと体壊すわよ。あんたが体調崩しても、看病するのはあたしなんだか

らね、今からご飯食べなさい。あたしが作ってあげるから。何でもいいでしょ？」

「うん、何でもいい」

食欲はなかったが、食べるしかない。またどら息子、馬鹿息子と怒鳴られるのはたまらない。

私は遅い昼食をとると、再び自室にこもった。といっても、特にこれといってすることはない。

暇である。こういうときは、ごろ寝するに限る。というか、私のニート人生のほとんどはこのごろ寝に費やされたといっても過言ではあるまい。

「ちょっと、あんたまた何もしないで、寝てるの！ 今何時だと思ってるの！ もう八時よ！ 八時！ ご飯できたから、起きて食べなさい！」

母は出て行った。

いつの間にか眠ってしまったようだ。とにかく、今は夕食をとることだ。

夕食をとっていると、父が帰ってきた。私の顔を見るなり、厳しい表情となり、凄まじい顔で私を睨んだ。

「正義、今日はどうして右翼の集会に行ったのか説明しなさい」

「今ご飯食べてるんだけど」

「それがどうした！ 大事なことを聞いてるんだ！ 父さんはお前の所为で機嫌が悪いんだ！ 説明しろ！ 説明！ ……まだ仕事が残ってるんだ、説明は手短に頼む」

「ヲチだよ、ヲチ。観察に行ったんだよ。それだけだよ」

「ヲチ？ ヲチってどういう意味だ？」

「ウォッチング、観察することだよ。つまり、僕は集会の参加者を観察するために行ったんだ」

「観察だと？ そんなことして、いったい何の得になるって言うんだ？ 父さん、さっぱりわからないよ」

「いや、だからさ、どんな人がいるのかと思って」

「正義、よく聞きなさい」

突然、父は改まって話し始めた。

「は、はい」

これは何かあるなと私は直感した。

「父さんは、いわゆる無党派層だ。だけど、どちらかと言えば、強いて言えば、護憲派、リベラル派なんだ。家が朝日をとっているのも、そこからきている。この意味、わかるな？」

「わかるよ」

「父さんとお前とは思想が違うらしい。違うことは悪いことではない。ただ、父さんが問題にしているのは、民自党や保守・右翼と言われる政治勢力が、あるうことか暴力団と結託しているということなんだよ。それぐらい、お前も知っていたよな？ 知っていたな、正義？」

「うん、知ってはいたけど」

「だったらなんで、行ったりするんだ！ お前は右翼に友達でもいるのか！ ええ！ どうなんだ、正義！」

「い、いや、いないけど」

「なおさらなんで行く？ どこに理由がある？」

「だから観察しよう」と

「観察！ そんなことで、父さんが騙されるとでも思っているのか！ 随分と甘く見られたものだな、これは！ 父さんはそれが理由ではないと思っているんだ！ 正義、お前は右翼だ！ そうだろ！ 違うのか！」

父の爆発ぶりは見ていて恐ろしかった。目が血走り、目はつりあがっていた。

第二章 キレル父親

私は必死に反論を試みた。

「ぼ、僕は右翼なんかじゃないよ。何度も言うけど、観察しに行っただけなんだよ。信じてくれよ、父さん」

「信じてくれだって？ はっ」

父が陰険そうな笑みを浮かべている。

「今更お前の何を信じろって言うんだ。せっかく大学まで行かせてやったというのに、それを放り出して、勝手に中退してしまう。それからもう二年になる。わかるか？ 二年だぞ？ 二年。二年も経つっていうのに、お前はそれまで何をやっていた？ 何をやったっていうんだ、正義！」

突如、父からは笑みは消え、またしても憤怒の形相となった。それにしても、よくもまあ、こんなに激しく表情が変えられるものだ。これはどうやったら習得できるんだろう。つらつらとそんなことを思いながらも、私は父に圧倒されていた。完全に。

「な、何もやってないよ。ごめんなさい、父さん」

「誰が謝ってほしいなんて頼んだ！？ 父さんは今、謝れって言っただか！？」

「い、言っていないよ」

「そうだろ！ 言っていないだろ！ 別に謝ってほしくなんかないんだよ、父さんは！ 父さんはとにかくお前に怒ってるんだ！ わかるか、この怒りが！ 悲しみが！ お前にわかるのか！ 答えろ！」

「わ、わかるってば。は、はははははは」

しまった。またいつものアレが出てしまった。

「なぜ笑ってる？ 正義、父さんは今、何か笑えるようなことを言ったか？ 正義！」

「言っていない、言っていないよ。ごめんなさい」

「お前は心の中で父さんを馬鹿にしてるんだろ！ 父さんにもそれくらい、わかるんだからな！ この野郎！ 父親を馬鹿にしがつて！ ニートの癖に！」

父は目を剥いて激怒していた。私はそわそわして落ち着かなくなってきた。それほど父の顔が怖かったのだ。

「お父さん、正義はあたしが怒ったときも笑ってたんですよ！ この子はねえ、人が怒ってるのを見ると、笑いたくなる性分なんですよ、きつと」

「そうなのか、正義！ お前、母さんが怒ってた時も笑ってたのか！」

「いや、あの、その」

「しのごの言わずに、答えなさい！」

「わ、笑ってたよ」

「何て奴だ、お前は！」

とうとう父は私の胸倉を掴んだ。

「べ、別に馬鹿にしてたわけじゃないよ！ 本当だよ！」

「じゃあなんで笑うんだ？ 父さんにわかるように説明しなさい」

父の目は据わっていて、見てるのは怖くて仕方なかった。自然と目をそらした。

「き、緊張しちゃってさ、それでなんか、おかしくもないのに、笑っちゃうんだよ、たぶん」

「たぶん？ なんだその答えは！ もっとしっかり答えなさい！」

「緊張して変になっちゃったんだよ！」

私ももう破れかぶれであった。もうどうにでもなれと思った。

「つまり、こういうことだな、緊張して変になって、おかしくもないのに、笑ってしまうと、こういうことだな、正義？」

「そ、そうだよ。……！！！」

私は右の頬に衝撃を受けた。父の鉄拳が飛んできたのだ。

「何を言うかと思えば、ふざけたことをぬかしやがって！ どこまで人をこけにすれば気がすむんだ！ この馬鹿息子が！」

二発、三発、四発、五発、六発……。父のパンチはとどまるところを知らなかった。

十数発目にして、父は殴るのをやめた。

「おお、いてえ。お前なんか殴って損したよ」

父は右手を盛んにさすっている。私の頬骨で手を傷めたのだろう。

父は何も言わず、冷蔵庫を開け、氷を取り出した。手を冷やすつもりなのだろう。

母が私に近付きいてきて言った。

「あんたが悪いんだからね。お父さんを逆恨みするんじゃないよ、わかった、この馬鹿！」

母は父の傍らに寄り添い、何事かささやいている。父も何度も頷いて応えた。

氷が欲しいのは、私も一緒のはずである。私が冷蔵庫に近寄ると、

「お前なんかに使わせる氷はない！」

父が血相を変えて言い放った。

「そうよそうよ！ あんたなんか氷要らないでしょうが！ この二

「ト！ どっか行きなさい！」

母も父に味方した。

仕方ない。私は洗面所に行き、顔を洗うことにした。

頬が熱い。熱を持っている。そして口の中が切れているようだ。
血の味がする。

第十三章 復讐計画

「正義は両親が冷蔵庫から離れた頃を見計らって、冷蔵庫をあけるも、氷はもうただのひとつも見当たらなかった。父親が全部使ってしまったのだ。ちっと舌打ちする正義は、ケースに水を入れた後、渋々自室へと引き上げた。音を立ててベッドに倒れこむ正義。もうすることもないので、眠ろうとするが、右の頬がずきずきと痛んでとてもじゃないが眠れない。正義はとうとうその日一睡もできないのであった。しかし、眠れなかったのは正義だけではなかった。父親もまた、左の拳が痛んで、眠れぬ夜を過ごしていたのだ。出勤間際、正義の部屋へ行き、ドア越しにがみがみ怒鳴りつけた」

ルシファアはペンを動かすのに忙しかった。

「正義、お前の所為で父さんは左の拳が痛くて痛くてしょうがなかった。のせいで、昨日はまったく眠れなかった！ たったの一時間も寝てないんだぞ！ これじゃあ仕事に支障をきたすかもわからない。どうしてくれるんだよ、このクソガキ！ おい！ 何とか言え！」

これは無視してはいけなさとっさに思った。

「眠れなかったのは僕も同じだよ。父さんが何度も殴るから、痛くてね」

「殴らせたのは誰だ！ もとわといえ、お前が原因じゃないか！

ひとの所為にするな！ お前は本当に卑怯で、見下げ果てた男だな！ 最低だ！ おっと、もう時間がない。お前なんかの相手をしている暇はないんだよ、父さんは」

父はそういうと去っていった。せいぜいするよ。

そうだ、氷。昨日、氷をつくるケースに水を入れておいたのだ。もう出来ている頃合いだろう。私は父がいなくなるのを待って、冷蔵庫へと向かった。

氷は完成していた。ビニール袋に適当な数の氷を入れ、それを右頬に当てる。

「正義は殴られた箇所を冷やしていると、次第に怒りがわいてきた。正義は父の暴力が至極理不尽なものに思われた。どうしてあんなに殴る必要があるのか。そりゃあ、怒っているときに笑われたら、誰だって不機嫌になるかもしれない。しかし、だからといって、暴力に訴える必要はないじゃないかと正義は思った。あの父親はおかしい。狂ってるんじゃないか。ちよっと笑ったくらいで、十何発も殴るなんて、常軌を逸している。そうだ、そうなんだ、あのオッサンは気が狂っているのだ。正義の心の中に、父親への復讐心がわいてきた。どうやって復讐してやろうか。いっそのこと、この際殺してやるか。殺してやりたいというのが正義の正直な心だった。父親への殺意は正義を完全に支配した。こうしていられないと、正義は自室へ駆け込んでいった。パソコンだ、パソコンを開くのだ、そして、殺害方法を検索するのだ」

しかし、数分間パソコンを操作しているうちに、私は考えを改めた。何も殺すことはないんじゃないだろうか。確かに理不尽な暴力は受けた。怒りもある。だが、殺すほどではないのではないのか。殺害はあまりに行き過ぎている。飛躍しすぎていると私は考え直した。

しかし、復讐を諦めたつもりは毛頭なかった。あれだけ殴られたのだ。こちらもあり返さねば、気が済まない。

気が付いたら私は、改造エアガンのサイトを見ていた。いつの間にかアクセスしてしまったのか、自分でもわからない。ネットサーフィンしていると、ごくたまに思いもよらぬところに行きつくことがある。こういう具合に。

改造エアガン。これはいいと思った。エアガンを改造して、威力の高いものにし、それをあの糞親父にお披露目してやるのだ。何も糞親父を打つことはない。ただ威力を思い知らせ、二度と私に暴力をふるわないようにする必要がある。

よし、これでいこう。早速私はネットの通信販売でエアガンを購入し、改造サイトに記載されたパーツの購入手続きを済ませた。後は到着を待つだけだ。

見てろよ、糞親父。私を殴りまくったつけは、高くつくのだ。私の怒りを、とくと思いい知らせてやる。あいつ、小便垂らすんじゃないか。今から色々想像するのが楽しくてしょうがない。早く着かないか。待ち遠しい。

糞親父め。後悔させてやる。絶対に後悔させてやる。泣いたって許してやるものか。あいつが許しをこうさまを想像してたら、何やらおかしくなってきた。はははははははははは。

「正義はひとり、自室で笑っていた。笑い声を聞きつけた、母親が正義の部屋に怒鳴りこんできた。正義は反射的にパソコンを強制終了させた。なんとかエアガン購入は母親に見られずにすんだようだった」

「あんた、ひとりで何笑ってんのよ。頭でもおかしくなったんじゃないでしょうね」

母が疑惑の目で私を見た。

「思い出し笑いだよ。何でもない」

「へー。思い出し笑いねえ。いったいなにを思い出して笑ったって言うの？　言ってみなさいよ」

答えに詰まる正義であった。重苦しい沈黙がその場を治めた。

第十四章 精神病院へ？

「さっさと言いなさいよ。何を思い出して笑ってたの？」

母がしつこく聞いてくる。しかし、答えようがなかった。思い出し笑いなどではないのだから、答えられるはずもない。だが、答えなければならぬ。

返事を窮する私を見て、母がまた口を開いた。

「あんた、やっぱりどこかおかしいんじゃないの？ 今日これから、病院行きましようよ」

何を言い出すのだこのお婆さんは。私は慌てて言った。

「どこもおかしくないよ。平気だよ。大丈夫だよ。僕は心身ともに健康だって」

「何言ってるんのあんた、誰がどう見てもおかしいじゃない。緊張して笑うと化、一人でいるときに笑いだすとか、あんた、おかしいのよ。もう今から行きましょ。準備して」

退出しようとする母を、私は呼びとめた。

「行くなってどこの病院？」

「頭の方の病院に決まってるじゃない。精神病院に診てもらうのよ」
とうとう人をキチガイ扱いか。さすがの私もこれには頭にきた。

「何で精神病院なんだよ。僕は何やったって言うんだ。ちょっと笑ってただけじゃないか。たったそれだのことで、精神病院行きなんて、やり過ぎだよ。おかしいのは母さんの方だよ」

「あたしがおかしい？ あんた今、あたしがおかしいって言ったの？」

振り返った母の顔は、怒りを露わにしていた。もはや恒例である。

「言ったよ。母さんはおかしいんだよ」

「あたしのどこがおかしいのよ？ あんたみたいにわけもわからず笑ったりしてないじゃない？」

確かにそうだ。面倒臭いことになった。私は一刻も早く、この場から立ち去りたかった。

私は無言で席を立った。

「病院行くでしょ？」

「行かない」

私はそう言い残して、玄関へ向かう。母が追いつがってきた。

「病院じゃなかったら、あんたどこ行くのよ？ また散歩？」

「そう、散歩」

こんなお婆さんの相手はもうごめんだった。父も母も大嫌いだ。

早くエアガンとパーツが届かないものか。私が気になることといえば、それだけだった。

「正義は武器を手に入れる」

ルシファーがフラウロスに向かって言った。

「そのようです。それで、そのあとは？」

「それは、見てのお楽しみって奴だ。こけからどんどん楽しく、愉快なことが起こってくる」

「そうですか。それは、たとえば？」

「そうだなあ。言っちゃおうかなあ」

「是非お聞かせ下さい」

「やっぱやめとこうかなあ」

「どちらなんですか？」

「だから言ったろ？　楽しく、愉快なことだと」

「それはルシファー様にとってでしょう？　正義にとってはどうい

う意味をもつのですか？」

「あいつにとっても、楽しいとき。だからあいつはそれをやるんだ。つまらないことを自分でやる奴はいないだろ？」

「確かに。しかし、それは正義が自分で選択した行動なのでしょうか？」

「お前が言いたいことはわかる。俺がこのノートに書いて、奴を操作してやらせると思っているのだろうが、それは違うぜ」

「違うのですか」

「ああ、見当違いもいいところだぜ。俺はそこまで人間に対して支配的ではない。俺はもっと人間どもの自由を大事にしたいと考えているくらいだ。お前は俺を誤解しているんだよ。反省しろ」

「それは失礼致しました」

「まあ、そんなことは、どうでもいい。それより正義だ」

「散歩に出かけましたね」

「ああ、そうだな。散歩好きの人間は多い。例の、ゼパルが目をつけている、谷垣なんとかというのも、散歩好きだ。だが、この際、散歩はおいといてくれ。どっかそのへんにな」

「散歩の件はどこかの脇に置きましたよ」

「置いてきてくれたか。それはありがたいな。で、今後の正義につ

いでだが」

ルシファーは改まって話し始めた。

第十五章 救世主がいないというなら、私になってやろう

私が散歩から帰ってくると、玄関に父の靴が置いてあった。ドアが開く音を聞きつけて、父が現れた。

「正義、お前のおかげで、父さんは手が痛くて、仕事にならなかったから、今日はもう休んで帰ってきたんだ。どうしてくれるんだ、正義！」

父は歯を見せて凄んできた。まさかこんな事態になるとは、家を出るときは全く考えていなかった。私が黙っていると、

「ふん。お前を相手にしていると、ろくなことがないな。もう父さんはお前と口利かないからな」

背を向けてその場を後にした。なんなんだこのオッサンは。自分で勝手にキレて、勝手に殴ってきて、勝手に痛めたんだろうが。私の所為にするんじゃない。

と、怒鳴ってやりたかったが、わざわざ状況をさらに悪化させることもないと思い、我慢した。

それにしても、この父親はなんなのだろう。どういう性格をしているのか。

なんで私はこんな目にばかり遭うのか。父も母も私に絡んで、小言を言っただけ。舌打ちや嫌味、皮肉は日常茶飯事化してしまった。

なぜあれほどまで私に悪意をむき出しにできるのか。私がニートだからか。ニートとは、そこまで嫌われることなのか。

やめよう。考えてもしようがないことだ。それに、数日中にエアガンと強化パーツが届く。改造エアガンさえ手に入れば、形勢を覆すことは容易い。とても簡単なことだ。あれさえあば、両親を震え上がらせることができるはずだ。

なれもつと早く考えなかったのだろう。改造エアガンという結果に達するのに、私はあまりにも多くの時間を無駄にしてしまったように思われる。ああ、時間を無駄遣いした。もったいないことをした。しかし、いくら悔やんでも、過ぎ去った時間は帰ってこないのだ。やめそう、悲しくなるから。

私は自室でも、煩悩をやめることができなかった。

私の日常、それは、家事手伝いや両親による舌打ち・嫌味・皮肉・小言から成り立っている。下らない。実に下らない。まったくもって下らなすぎる。下らなすぎるほどに下らない。はっきりいって、日本有数の下らな人生を私は送っていると思う。

あまりに暇だ。私はあまりにも時間をもてあまし過ぎている。しようがないので、テレビやアニメや小説や漫画や映画で時間を潰しているが、それとて、別に特に好きというわけでもないのだ。

私の日常。あまりに退屈な日常。私は変化を渴望した。

そうだ。変化で、あの男を思い出した。瀬羽大輔。かつて、世界

ニート帝国の初代皇帝を名乗り、その建国を宣言した男。

私はあのととき、身震いした。来るべき時が来たと思った。ついに救世主が現れたのだと直感した。

それなのに、結局、何も起こらなかった。瀬羽はどうやったのかわからないが、日本武道館に一人のニートを集めたが、彼がやったことと言えば、それだけだった。瀬羽は消えてしまった。以後、彼の消息を知る者はいない。もとはといえば、そもそも瀬羽の経歴は謎の包まれていた。誰も彼のことを知らなかったのだ。マスコミがいくら調べても、瀬羽大輔なる人間が存在した足跡をたどることはできなかった。正体不明の男、瀬羽大輔。

あいつも何もしてくれなかった。私を救ってくれなかった。私はこんなにも、日常が暇で暇で、退屈で退屈で、毎日時間を潰すのに汲々としているというのに。

誰も助けてくれない。救世主など、いないのだ。

私はどうすればいい。自問自答しても、答えなど出てこない。親は口を開けば働けという。しかし、働く意欲もわいてこない。なぜわいてこないのか、それさえもわからない。

考える時間は終わったのだ。悶々と思い悩んでも、何も得られない。もうすぐ、私は力を手に入れる。そう、改造エアガンだ。それによって、私は変貌を遂げるはずなのだ。

誰も助けてくれないのなら、自分で自分を救うしか手立てはない。

第十六章 終わりの始まり

夕食の時間を母が告げてきたので、しぶしぶながら私はテーブルへ向かった。

父は渋面を作っていた。

「なんでお前と一緒にご飯を食わなきゃならないんだよ。飯が不味くなる。自分の部屋で食べてくれないかなあ。なあ、母さん？ 母さんはどう思う？」

父は母に視線を送った。

「そうね、あたしもこんな馬鹿息子とご飯食べたくないわ。あんた、部屋行って食べなさい」

私は無抵抗に、それを受け入れた。

その晩は何も起こらなかった。いや、何も起こさなかったと言わなければならない。私はつとめて大人しく過ごしていた。

翌日、念願の待ちに待った至福の時が私に訪れた。

「正義、代引きだって。何頼んだの？ また無駄遣いして」

私は母の小言を無視して、配達員に代金を支払った。段ボール箱を抱えて、部屋へ駆け戻った。

私はドアに鍵をかけ、段ボールを開いた。エアガンだ。

改造サイトを見ながら、改造を始める。

楽しい時はあっという間に過ぎるという。今の私がまさにそれだった。瞬きすね間に、改造エアガンは完成した。

試し撃ちをしてみようと思い立った。分厚い辞典を的にし、引き金を引く。

辞典に大きな穴が出来ていた。そればかりではない。壁までも突き破っていたのだ。恐ろしいほどの威力である。

私は歓喜のあまり、飛びはねた。

玄関のドアが開かれた音を、私の耳が捉えた。偉大なる親父殿の御帰りだ。ベストタイミング。またとない機会だ。どうしてこうも事がうまい具合に運ぶのか。自分でも怖いくらいだった。

私は、改造エアガンとプラスチック製のゴミ箱を手に、父のもとへ向かった。

父は私が改造エアガンをもっていることを見て、驚愕した。

「ま、正義！　そ、それは本物か！」

すっかり仰天し、今にも腰を抜かしそうな有様で、口をパクパクさせているのが見ていて哀れなほどであった。

「まさか。まあでも、そうともいえるかも。ほら、見ててよ」

私はゴミ箱を床に置き、いくらか距離を取って離れた後、撃った。

ゴミ箱にも大きな穴が開き、破片が辺りに散らばった。

「！」

父は声も出ないようだった。

「どう？　凄いでしょ？」

「そ、そんなもの、どこでどうやって手に入れたんだ？　私に寄こしなさい」

私は近寄ってきた父の額に、銃口を向けた。

「ひっ！　ま、正義、な、何をするんだ！？」

「別に。何もする気はないよ。今のところはね。お父さん、よくもこの前僕を何発も殴ってくれたよねえ。何発も何発も。まだ痛むよ」

「そ、それはお前が」

私は父の言葉を遮った。

「いや、父さんが悪いんだ！ いいか、よく聞けよ、糞親父！ 二度と僕を殴ってみろ、ただじゃおかない、この改造エアガンで頭を吹き飛ばしてやる！」

言ってやった。とうとう言ったやったと私は思った。これでこいつも少しは大人しくなるだろうと私は考えた。

しかし、父の返答は私の予想を覆すものだった。

「なんだと！ 親に向かって、なんだその口のききかたは！」

「!？」

今度は私が仰天する番だった。あの威力を目の前にして、銃口が向けられるているにもかかわらず、このオッサンは何をほざくのか。

「撃ちたいか！ そんなに父親を撃ちたいか！ 撃てるもんなら、撃ってみろ！ どうせお前にゃ、できやしない！ その玩具を手に入れて、お前は強くなった気にでもなってるんだろうが、お前は何も変わりはない！ お前は何もできないただのニートだ！ ニートに犯罪者になる勇氣はない！ お前はただの弱虫の腰ぬけなんだよ！ わかったか！ わかったら、さっさとその玩具を渡せ！」

「この糞親父！ 死ね！」

怒りにかられた私は父の額を狙って改造エアガンの引き金を引いていた。

第十七章 時代の支配者となろう

父は床に昏倒した。額にエアガンの弾が食い込んでいる。父は白目をむき、体をぴくぴくと痙攣させていた。

父が床に倒れた音を聞きつけて、母がやってきた。来るなり、悲鳴を上げた。かなきり声とは、こういうものを言うのだろうか。

「お父さん！ 正義、あんたって子は！ この、人殺し！」

私は母にも銃口を向けた。この際だ、ついでにこの口うるさいババアも消してしまおうととっさに考えた。

「ひいっ！」

母は物凄い勢いで逃げ去った。母も撃つか。追いかけるのが面倒だな。やめておこう。

人殺し、か。母が私を非難する声が脳裏の残る。しかし、こいつは本当に死んだのだろうか。

ふと、私はそんなことを考えている場合ではないことを察知した。逃げなければ。それもあるだけ遠くへ。

私は倒れている肉の塊から、財布を抜き取った。急いで自室に行き、出かける準備をした。

私は家を飛び出した。

もとより、行くあてなどなかった。

まずは変装しなければならなかった。じきに母が警察に通報すると思われたからだ。

私は手持ちの金で、サングラスとマスクとキャップの帽子を購入した。てんで不審者である。これでは、やらない方がむしろましなのかもしれないと思ったが、やはり、変装しておくことにした。

「仙石首相は、八月九日に行われる、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に出席することを決定致しました」

駅前を歩いていると、大画面のモニターでニュースがやっていた。仙石義人。保守・右翼勢力から日韓併合についての談話で盛んに批判されている人物だった。

私はもう人殺しになってしまった。れっきとした犯罪者だ。どうせ逃げきれなくなり、捕まってしまうだろう。そして裁判を受け、刑務所へ行くのだろう。なりたくて殺人犯になったわけではないが、もはやそれらは避けられない既定路線である。

捕まるまで逃げ続けるつもりだったが、先ほどのニュースを聞き、考えが変わった。

私はもう犯罪者なのだ。それも殺人犯。凶悪犯罪者だ。一人殺すも、二人殺すも同じじゃないか。

仙石談話断固反対国民総決起集会で仙石を口々に批判する人物たちを私は思い出していた。しかし、彼らに何ができるだろう。集会を何度開こうが、デモを何度やろうが、談話は発表されてしまうのではないか。

彼らは結局、無力ではないのか。彼らに談話を阻止する力など、ありはしない。

彼らはただ、あそこで演説をぶち、デモでシュプレヒコールをあげて、気持ちよくなりたいたいだけなのではないか。ただのオナニー演説、オナニーデモ、オナニー集会じゃないのか。

私はなんだかばかしくなってきた。世の中、下らない。

井桜誠。強烈なキャラを主張していたあのデブとて、結局は無力な存在にすぎないのではないかという考えが頭をもたげた。

私には力がある。この改造エアガンだ。だが、お前にあるのは、脂肪・贅肉だけじゃないのか、井桜よ。

父が言っていた。私は何もできないただのニートだと。既にそうではないことを私は証明してやったが、さらに証明が必要ではないかと私は考えた。

考えてみれば、現代日本は、非常に政情不安・治安不安の時代だった。岩崎文太なる右翼ニートによる大量虐殺政治テロ、輪美明宏による大阪城占拠事件、ネットで噂される東京都庁襲撃事件と、きな臭い話題には事欠かない。

それが今の時代だというのなら、私も後に続くのではないか。私がさらに政情不安・治安不安に一石を投じてやるのだ。

私が時代を作るのだ。なんの力もないと思われてきた、ニートであるこの私が。

仙石義人を暗殺する。そして、時代の支配者となる。私はその考え、というか妄想に囚われてしまった。完全に。私はその実現に向けて歩き出した。向かうは長崎。狙うは、内閣総理大臣・仙石義人。

最終章 日韓併合一〇〇年のテロリスト

私は長崎の式典会場の入り口付近に立っていた。喪服と黒のネクタイは来る途中、買った。伊達眼鏡もつけ、口髭も拵えてある。髪も床屋に行き、思い切って丸坊主にしてもらった。

ここで仙石を待ち伏せし、入ってくるところを改造エアガンで射殺する計画であった。

蟬がわんわんと鳴いている。耳触りではうがなかった。

突然、男に話しかけられた。

「あなたは何でさっきからここに立ってるんですか？」

私と同じく喪服姿の男である。警備関係者か何かだろうか。

「人を待ってるんです」

私は内心穏やかではなかった。ここで私の暗殺計画は頓挫してしまうのか。

しかし、男は、

「そうですか」

と言いついて、立ち去っていった。こんな警備態勢でよいのだろうか、テロリストになろうとしている私は心配になった。

時間が経った。今までの私の人生の中で、最も長い待ち時間だったような気がする。私はとにかく待たされた。

早く来ないか。早く来てくれないか。仙石よ。私は時代を作り出す創造者になりたいのだ。時代の支配者になりたいのだ。

私はテロリストになろうとしていた。しかし、私は日韓併合も仙石談話もどうだってよかった。とにかく、時代の創造者・支配者になりたかったのだ。

私の時代は来なかった。私は社会にとって不必要な人間だった。私は社会から見放されたニートだった。

だが、今は違う。今度は社会が私に屈服する番なんだ。平伏せ。

私はそこかしこで、ニートを愚弄する言説を見聞きした。ほとんどうんざりさせられた。そうまで私を否定するというのなら、私も社会を否定してやる。そう思った。いや、明確にそう考えたのは今が初めてかもしれない。

仙石が姿を現した。数名のSPとともに、こちらに向かってくる。

私は待った。奴が射程範囲に入ってくるのを待った。そして、私と奴の距離がわずか数メートルになったとき、私は懷からエアガン

を取り出し、駆け出した。

「仙石ー！」

私は雄たけびをあげて、引き金を引いた。そのとき、ふいに肥満男井桜誠の顔が浮かんた。そうだ。私はお前を超えてやるんだ。お前がなれなかったものに私はなってやる。私はもう井桜の濃厚なキヤラクター性に憧れたりはしなかった。

私は仙石を見た。仙石の両目は大きく見開かれ、顔はこわばっていた。

仙石は私に暗殺されるはずだった。しかし、SPが邪魔をした。私に背を向け、仙石に覆いかぶさるようにして、奴をかばったのだ。私が放った弾丸は屈強なSPの背中に命中した。

SPのひとりが、拳銃を構え、撃った。私は数メートルほど吹っ飛ばされ、腰を打った。右肩に命中したのだ。

それでも私はエアガンを離さない。左手でもち、今度はそのSPに狙いを定めていたところを、さらに左肩を撃たれた。私はエアガンを手放した。

私は時代の創造者・支配者になりそこねたのだった。

この一部始終を安全地帯から眺めていた者が二人あった。ルシファーとフラウロスである。

「正義は逮捕されてしまいましたね」

「ああ。いい線いってたのになあ。残念賞だな」

ルシファーは本当に残念そうな顔をして言った。

「しかし、これもルシファー様の筋書きのうちではなかったのですか？」

「まさか。俺はノートにそんなこと書いてないよ。あいつが勝手に決めてやったことだよ」

「本当ですか？」

フラウロスはにわかには信じられない。

「マジだって。そんなに疑うなら、ノート見る？」

「いえ、けっこうです」

「あそ。それにしても、ほんとにあと少しだったのになあ。もったいなかったぜ」

「それなら、ノートにお書きになればよかったのに」

「一から十まで書いてたら、面白くないだろ。前も言わなかったのか？」

「おっしゃったような、おっしゃられなかったような」

「どっちだよ」

ルシファーは白い歯を見せて笑った。

「さてと、次の暇潰しを探さないとな」

ルシファーの頭からは既に山田正義は隅の方に追いやられ、次なる「暇潰し」に興味の対象が移っていた。

「ほんと悪戯が御好きですね、ルシファー様は」

「悪戯好きじゃない悪魔なんているのかよ」

二人が談笑している頃、山田正義は最寄りの警察病院へ連れて行かれるところだった。正義はいえ、両肩の激痛に耐え、歯を食いしばっていた。そして、こう思った。自分は井桜を超えられたのだろうか、と。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505n/>

『日韓併合一〇〇年のテロリスト』

2010年10月9日23時11分発行